

藩境の文化に魅せられて

老田地区・歴史探訪歩行会

「旧北陸街道を歩く」実行委員会

第8回歴史探訪・平成27年11月15日(日)

日程とコースタイム

- 8:00 受付(富山の水道水ボトル配布)
8:45 班編成
9:00 開会式
9:15 ~ 9:30 「老田地区」の概要について
9:30 スタート(第1班)



(説明個所と時間帯)

- | | |
|-----------------------|-------------|
| ① 箒莪小学校(老田小学校の前身)誕生の地 | 9:40~10:10 |
| ② 中老田加茂社 | 9:55~10:25 |
| ③ 「海内果」生誕の地 | 10:10~10:40 |
| ④ 巡見上使道と道番 | 10:25~10:55 |
| ⑤ 「田中可成」「真野成次」筆塚 | 10:45~11:15 |
| ⑥ 東老田神明社と功績碑 | 11:05~11:35 |
| ⑦ 本浄寺と義人碑 | 11:25~11:55 |

11:45~12:30 到着予定時間

11:45~13:00 豚汁サービス

14:00 (本部解散)

(私の番号) 第 班 番

(緊急連絡先) 実行委員会事務局・電話番号090-9767-4579

藩境の文化に魅せられて (第8回歴史探訪歩行会)

No 名称 場所

見どころ解説

老田地区の概要

呉羽丘陵の西側に広がる老田地区は、人口約3.5千人で西二俣、願海寺、野々上、中老田、東老田地区がある。律令制下での越中国の射水郡に属し、その後賀茂神社の倉垣荘を経て、藩政時代、加賀藩領となり、富山藩との藩境に位置していた。明治に入り廃藩置県となって金沢県となるが、富山県の誕生により、富山県射水郡となる。現在は、昭和の合併から呉羽町を経て富山市となったが射水市との境界に位置する。このように老田地区は、いつも郡境や藩境に位置していた。また古来からの北国街道が地区の南側(小矢部線)を東西に走り、その後、加賀藩の参勤交代路として使われるが、高岡町が出来てから、高岡町から小杉手崎、願海寺を経て富山町に向かう富山道が出来た。さらに富山藩が誕生してからは、小杉手崎から下村をへて西岩瀬へ向かう街道が主要な参勤交代路となる。

このような街道筋には、藩境であったことから茶屋や道番などが置かれ、さらに歴史の節目では、鎮撫使節団、明治天皇の北陸巡幸のさいの御休所ともなった。

また産業面では、平坦な水田地帯から水利の確保に苦勞した地区で、地区外の用水から水を牽く、また地区外でため池を作るなど多くの犠牲を払っている。それだけに教育熱心な地区で多くの教育者を輩出し、今も富山国際大学の関連機関が拠点施設となっている。

このように郡境や藩境であった長い歴史のなかで培われた文化が随所に残る地区である。

① 忠魂堂

老田地区の出身者で、明治10年の西南戦争以後の殉国戦没された英霊、101柱が合祀されている。(西南戦争2名、日清戦争1名、日露戦争6名、シベリア事変1名、上海事変2名、支那事変13名、太平洋戦争76名。)忠魂堂が竣工したのは昭和9年である。昭和20年(1945)日本の敗戦により連合軍から忠魂堂の撤去が指示され、一時は他の場所に保管されていた。

昭和30年頃、当時の老田自治会・顕彰会が協議のうえ、現在地に再建した。慰霊祭は、毎年8月24日厳粛に行われている。昭和52年、英霊101柱の氏名を刻んだ石碑が、忠魂堂敷地内に建立された。(写真は、前のお堂)



② 本庄山専称寺

宗派:真宗本願寺派
開基:藤原五郎丸
承暦年間(1077~1080)、後三条天皇の第三皇子園宮が乱を避け、越中に来たとき供奉して来た藤原五郎丸が、旧小杉町で出家して僧侶となり当寺を再興した。

その当時は他宗であった。文明4年(1472)、本願寺八代門主蓮如上人が越前吉崎に来たときに上人の教えにより浄土真宗に改宗している。天正元年(1573)に、中老田で再建された。



③ 箐我小学校(老田小学校の前身)

学制の頒布(明治5年、1872)により老田地区に明治6年8月8日、「箐我小学校」が誕生した。最初の提唱者は海内果で、兄の森田清風宅を借りての開校であった。「箐我」とは、「人材を育てる」という中国の詩經によるもので、その後、明治20年、中老田杉ノ木に校舎ができて尋常科を「箐我小学校」と呼んだ。



④ 赤尾山慶楽寺

宗派:真宗大谷派
開基:宗真
山号の赤尾山は、五箇山上平赤尾の行徳寺(赤尾道宗)の流れをくんで名づけたらしい。開基は、慶長12年(1607)、年号から共に喜び楽しむ寺をイメージして慶楽寺にしようといわれている。

旧本堂、庫裡は安永年間(1772~1780)に建立され、その後、数回修理が行われ、現在の本堂は昭和56年に再建された。釣鐘は戦時中に供出したため、昭和36年に鑄造し、釣鐘堂は平成13年再建された。



No 名称 場所

見どころ解説

⑤ 中老田加茂社

祭神:天照皇大神、他四神合祀
祭礼:春祭 4月第4土曜日 秋祭 9月5日
明治4年(1871)、現在の山王社の西側へ中老田加茂地区にあった加茂社が遷宮された。その後、明治40年神明社三社及び羽右衛門宮等を合祀して本殿・拜殿とも改築されて今日に至っている。

「山王社」は、豊臣の武将であった村上喜左衛門が、大阪城が落城したため中老田に逃れて来て農民となり、現在の地に鎮守の宮を建立したと言われている。村上姓は末裔にあたる。

「加茂社」は、山城下賀茂社の荘園に建立された社で、動請年月は不詳であるが、当時の城主城石主亮が加茂社を創建したと伝えており、城石姓は末裔にあたる。



⑥ 五智山乗福寺

宗派:真言宗
開基:自信房一品法親王弘性上人
奈良時代の慶雲4年(707)、仏性上人が父の追善のため「五智如来」を彫刻して、七堂伽藍を建立して安置した。これを機に五智山乗福寺と寺号を改めた。当時の宗旨は三論宗であったが、空海が唐より帰朝して真言宗の布教に努めたので、それに帰依し真言宗に改宗した。

天文7年(1538)、越後の長尾為景が越中へ進攻、その兵火によって寺院は全焼した。その後90年間、僧侶が住することなく中断した。江戸時代の宝暦8年(1758)、現在の地で再建したが、その後、修復・増築などが行われてきた。平成8年、本堂、境内などの大改修が行われた。



⑦ 鍛冶川の由来と舟運

鍛冶川の水源地は、山田・音川・古洞ダムを発し、支流の水を集めて中老田に入ってくる。

下流は西二俣・願海寺・野々上を経て富山湾に注いでいる。昔から流域は鉄分の多い土質で、仏具・農具をつくる鍛冶屋が住み着き、「鍛冶川」となっていたといわれている。

昭和25年頃に水路を変更したが、上流には精錬カスを捨ててきた金糞(金草)岩が残っており、小字名「金糞」としても残っている。

川の流れを利用して、江戸時代から明治までは放生津への舟運も盛んであり、中老田には12艘の舟が発着したという。

大正時代に荷馬車の運搬が始まり、昭和に入ると、トラック輸送と変化したため、衰退した。

今では水路も変更され、舟場の面影は全くなくなった。

⑧ 郷土の偉大な思想家「海内果」の生誕の地

幼少の頃から読書に親しみ、長じては儒学者岡田呉陽に漢学を学んだ。その傍ら、西洋の法律書や歴史書の訳本などを通し新しい思想を身に付けていった。

明治4年、22歳で村肝煎(村長)となり地区の行政に携わる。明治6年、前年に義務教育4年制が公布されたのを受けて、老田地区に箐我小学校(老田小学校の前身)創立を提唱し中老田に開校させた。

明治8年、東京日日新聞の一面トップに寄稿した「人民八民権の元素タルノ説」が掲載された。

明治9年、新聞社の再三の要請を受け論説記者として上京。4年間で百編以上の社説を書くなど言論界で活躍する一方、郷土での「相益社談」の刊行や「越中義塾」の創設など思想啓蒙に尽力していた。



⑨ 前の乗福寺の跡地

前乗福寺の跡地で昭和54年5月に建立された石碑が建つ。うらに千手観世音菩薩の御詠歌が刻まれている。前の乗福寺は、長尾為景や上杉謙信の越中攻めの戦火に伏しており、その後、観音小堂が建てられていたが、江戸時代の宝暦8年(1758)、現在の場所において乗福寺が再建された。



⑩ 巡見上使道の道番と石碑石仏

県道(富山戸出小矢部線)の北側を並行して通っている道路は、金沢・石動・水戸田・黒河から富山に至る古い街道である。

3代將軍家光が寛永10年(1633)に全国を6区域に分けて、地方政治の監察と地方主要道の整備状況を視察させるため、3人1組の巡見使を派遣する制度を設けた。その巡見使の通る道に定められたのがこの道である。巡見使とは幕府上使のことをいうので、この道を巡見使



道、または巡見上使道ともいう。又、豊臣秀吉が佐々成政を降伏させた天正13年(1585)、太閤山から白鳥城(呉羽丘陵)へ陣を進めたとき、この道路を通ったとされる。
 その後、寛文6年(1666)、加賀藩はこの道にかかる鍛冶川橋の淵に道番2人(関兵衛、長兵衛)を置いて往来の安全を見守らせた。今もこの辺りを、小字名「道番」として残っている。
 このような巡見上使道沿いには数多くの石碑や石仏がある。老田地区内を紹介すると、西の鍛冶川から東へ、西南戦争と日清戦争で亡くなられた人の慰霊碑があり、さらに東へ、庚申さまのお堂、筆塚、馬頭観音碑、地藏尊をへて東老田に入り、県道との接続箇所(納経塚、地藏尊)がある。
 わずか1Km余りの区間であるが、集められたものもあるが、旅人の安全を願って建立されたものであろう。

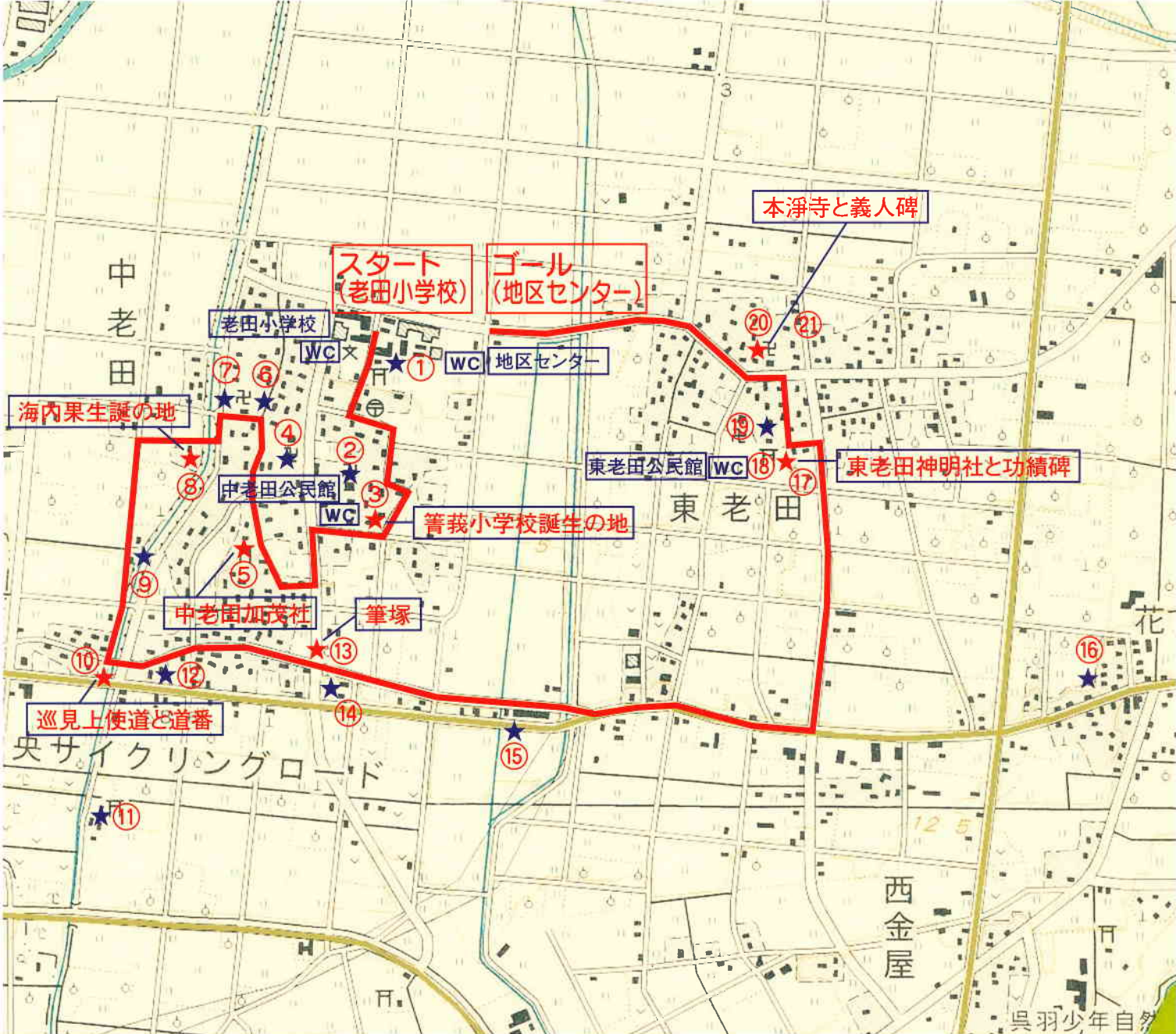
① 薬師如来堂
 江戸時代初期、現在の場所(鍛冶川と自転車道の接点付近)より20m南側に、ぬるま湯が湧き出している場所があったという。当時の住民が、その場所に薬師如来堂を建てて、病氣平癒の祈願所としたのが始まりである。その後、天災地変によりぬるま湯は出なくなったが、住民の信仰厚く、病氣や怪我はもとより、脚氣の平癒に早朝の露を踏んで草鞋を奉納する習慣もあった。
 古くなったお堂は何回も建て替えられて来たが昭和43年農業改善事業により現在地に移転し、平成22年にお堂と鳥居が再建された。近年、病氣の全快のみならず、商売繁盛(売薬業など)や合格祈願にお参りする人もいる。



⑫ 健康長寿を願う
 庚申さま
 地元で庚申さまと慕われている石仏は、青面金剛童子像で、左右両辺に二童子が立ち、裏面に、文化4年(1807)と記され208年前に安置されたものである。お堂は、中老田の加茂社に合祀されていたことから、その拜殿が使われている。



⑬ 寺子屋教育に尽力した「田中可成」と「真野成次」の筆塚
 昔の子供は寺子屋で、読み・書き・そろばんを学んだ。義務教育ではなかったため、通ったのは男子だけで、経済的に行けない子供もいた。
 田中可成は、老田の寺子屋教育の草分けである。幼少の頃から勉学に興味をもち、高岡の某先生の下へ通って学んだという。修業のあと、中老田に寺子屋を開設し、村内・近隣の子弟に文筆を教え敬慕された。寺子屋の教育に携わったのは、文政11年(1828)から弘化4年(1847)の20年間である。
 真野成次は、独学で漢学・漢詩を修行し、また仏教を信じて帰依したという。嘉永元年(1848)から20年間、18か村の子弟を集めて読み・書き・そろばんを習得させた。
 海内果も弟子の一人だったという。田中・真野両教師の死後、子弟らが使い古した筆を埋めて石碑(筆塚)を建立した。



No 名称 場所 見どころ解説

⑭ 馬頭観音
 旧射水郡であった老田地区は、明治・大正時代まで湿田が多く、農作業は鎌を中心とした効率の悪いもので、ワイル氏病にも悩まされた。
 大正8年、27才の南原繁(後の東大総長)が郡長として中央から赴任し射水農業公民学校(現小杉高校)の設立と、乾田化事業を進めたことにより馬耕へと進歩した。
 昭和初期には、農耕馬の数が増えて農作業は効率化した。役馬の労苦に感謝するとともに、その無事息災を祈り、病死の馬の冥福を祈るため、昭和8年に老田村内の有志が発起人となり、村内から浄財を集め馬頭観音が建立され、毎年8月18日に、有志・末裔により祭礼がおこなわれてきた。



⑮ 平沢池、二階堤の跡
 旧呉羽梨第二選果場の敷地周辺が、平沢池の跡地、また東老田西交差点の南側に二階堤があった所である。
 江戸時代は、老田地区の耕地の大部分が水田である。鍛冶川や古沢用水の多少の水を利用してきたが、上手集落の影響をうけて水不足は深刻であった。その水不足を補うために、平沢池(2町歩)・金草(全糞)池(1町歩)・中才池(8反歩)、東老田の六泉池(古沢の飛び地)や二階堤などが造られたのである。
 灌漑の終る9月初め、村祭りがあるので、前日に池の清掃を兼ねて放流してあった鯉の掴み捕りがにぎやかに行われた。住民にとって楽しい行事の一つであった。
 昭和40年頃、農業構造改善事業(用排水路整備)のため、平沢池をはじめ、他の池も埋め立てられて農地に転用された。今は平沢池の跡地に、当時を偲ぶ案内(説明)板が立っている。



⑯ 郡境及び加賀、越中富山の藩境
 律令制下の越中国では、砺波、射水、婦負、新川郡の四郡が置かれ、東大寺や西大寺などの荘園も数多くあり、その後も賀茂社の倉垣荘など寄進地荘園が誕生した。やがて荘園を守り拡大を図る武士が権力を持ち、そして幕府が誕生し支配した。各国に守護と地頭が置かれ越中国では守護職に「畠山」、砺波郡、「遊佐」射水、婦負郡、「神保」新川郡、「椎名」の四氏が権力抗争するようになる。戦国時代へと突入り、やがて江戸時代を迎え藩政時代となる。このような情勢の中で老田地区は、射水郡と婦負郡、または加賀藩と越中富山との藩境となり、それが故の文化が育ってきた。



⑰ 東老田 神明神社
 祭神:天照皇大神 豊受大神 弥都波能売神 大物主神
 祭礼:春祭 4月第2土曜日 秋祭 9月第1日曜日
 神明社の詳しい沿革は不詳であるが、宝永3年(1706)社号帳に、東老田神明社の記録がある。古来「鎮守の森」という言葉にふさわしく、杉が鬱蒼と茂っていた。
 昭和49年に伐採された杉の大樹は、樹齢約400年、周囲7mもあった。
 平成16年、記録的な猛暑と豪雨、及び台風により杉が多数倒伏し、現在の姿となった。明治42年、東老田新字平沢にあった神明社を合祀し「神明神社」と改称した。昭和6年雨宮社、同40年東老田新にあった金刀比羅社、平成2年黒河新にあった神明社を合祀。
 平成17年に拝殿・幣殿を改築した。翌18年4月、改築記念誌『東老田の鎮守の森』を発行している。
 神社の屋根の棟の両端に火災の時に水を呼ぶという鯉がある。社紋は「丸に左三階松」である。



主催／呉羽山観光協会・「旧北陸街道を歩く」実行委員会
 共催／北日本新聞社
 後援／富山市・富山商工会議所・富山市北商工会・呉羽懇話会・五福、桜谷、呉羽、長岡、寒江、老田、古沢、池多各自治振興会及び各ふるさとづくり推進協議会

No 名称 場所 見どころ解説

⑱ 東老田に功績のあった瀧脇辨吉・石川三次郎
 瀧脇辨吉(1858~1929) 明治30年から大正12年まで26年間、東老田の区長を務め、神社・寺院を中心とした村民融和や、環境・衛生・道路改良など集落の発展に尽くした。また射水郡の郡会議員を2期務め、地方自治の発展に数多い功績を残した。特にため池や用排水路を改修して140町余の沼田を乾田化した功績は大きく、村人らは功績に報いるため、大正14年、改修した溜池堤上で整備された美田を見渡す位置に石碑を建てた。(碑はその後東老田公民館前に移転)
 石川三次郎(1865~1936) 明治22年、24歳の頃静岡県で製茶法を習い、同県の師と共に巡回伝習をし6年後に指導者の免許状を受けた。その後、富山に帰り県の指導の下に、東老田に「製茶伝習所」を開設し、製茶改良に努めた。呉羽・老田・黒河・橋下条各地より教えを乞う者多数集まり、三次郎の指導により製茶業が盛んになったといわれている。大正11年に亡くなり、同年東老田公民館前に顕彰碑が建てられた。



⑲ 易住山 常入寺
 宗派:真宗大谷派
 開基:不明
 天和2年(1682)、富山市永福寺下の常入寺として東老田に創設された。創設以来150年余、地区住民の教化に努めたが、天保9年焼畑に遭い廃寺となる。
 その後、江戸後期、子孫の一人が東老田に転住し、明治5年常入寺を再興した(中興第七世常念)。
 現本堂は、明治24年(1891)の建立である。
 本尊は、阿弥陀如来の大きな立像である(作者不明)。



⑳ 東獄出 本浄寺
 宗派:曹洞宗
 開基:十三世陽山和尚
 天正14年(1586)に、建立された海岸寺の布教所的な庵から始まった本浄寺であるが、篤志家の寄進により大伽藍として発展した。東老田周辺に多くの田畑、境内地を認め、七堂伽藍を造成することが出来た。現在、寺橋・観音寺屋敷など、ゆかりの地名が本浄寺からかなりの距離に残っている事からも大伽藍であった事が推定できる。
 文政5年(1822)火災に遭い観音堂を残して全焼。その後30年の年月を経て再建された。
 寛政2年(1790)頃に瀧脇総本家から[聖観世音菩薩像]が寄進された。秘仏として御開扉を33年に一度の大祭が行われている。
 近年、梅花講が再興され、各法要にご詠歌がお経と共に響き渡る。また、先代の頃より縁起干体達磨供養を行い健康祈願や交通安全の祈禱を行っている。



㉑ 義人 中川忠三郎
 東老田地区は古来より灌漑の便が悪く、古沢用水の落水水を利用するしかなく、天水(雨水)の恵みを祈願(期待)する状態だった。
 安永2年(1773)に中川忠三郎が、栃谷村(古沢)のはずれで、水が落ち合う窪地から用水を引くこととし、用水路工事にかかったが、栃谷村民との騒動になり、忠三郎はその犠牲となった。
 その後、栃谷村(富山藩)と東老田村(加賀藩)との訴訟事件となったが、和解して用水工事が完成した。大割用水と名付けられ、東老田の西部の水田の灌漑に役立っている。
 東老田の住民は、本浄寺境内に石碑を建て忠三郎の徳を偲んで毎年8月24日に慰霊祭を行っている。



富山観光ホテル TEL 076-431-5551
 「旧北陸街道を歩く」実行委員会事務局(山口) TEL 076-436-0611
 Eメール:i-yama51@pk.ctt.ne.jp